８　「物語」　─中世の擬古物語

16年度　神戸女学院大学

★　次の文章は、男主人公氏忠（弁の君・少将）が遣唐副使に任じられ京から旅立つことになる前後の場面である。氏忠と、両親である大将・皇女（母宮）、思いを寄せながら結ばれないの皇女等の様子が述べられる。読んで、後の設問に答えよ。

　絶えぬ思ひによろづのことおぼえで明け暮らすに、明けむ年、もろこし舟出だし立てらるべき遣唐副使になしたまふべきア宣旨あり。大将も皇女もいみじきことにおぼせど、すべてすぐれたるを選ばるるわざなれば、とどめむ力なし。弁の君、ひとかたならず　Ｘ　の涙を流せど、ⓐいづれも心にかなふわざにしあらねば、〈神奈備ノ〉皇女つひに参りたまひぬ。時めきたまふこといみじきを見聞くに、Ａいとどあぢきなさまさりて、かく《　ア　なむ　》。

　　おほかたは憂き目を見ずてもろこしの雲のはてにも①入らましものを

　朝夕の宮仕へにつけて、耐へがたき心をも、②なかなかひとかたに思ひ絶ゆばかり漕ぎ離れ《　イ　なん　》も、ひとつにはⓑうれしけれど、親たちの気色をはじめ、Ⅰおはせんさまをだに見聞かざらむことをいみじう思ふに、月日過ぎて、Ⅱそのほどにもなりぬ。

　式部大輔なる参議安倍のせきまろといふを、大使にて遣はさるべければ、かつがつ世の博士・道々の人集まり、才を試み、③いとどしういどみならはすに、この少将、すべて至らぬところなく賢ければ、イ御門もいみじき物にｉおぼしめして、春、正下の加階たまふ。

　いまはと出で立ちて京を出づるに、高き卑しき、④馬のはなむけす。⑤夜すがら文作り明かして、出で《　ウ　なん　》とするに、いみじう忍びてたまへる、神奈備の皇女、

　　もろこしの千重の波間にたぐへやる心もともに立ち返り見よ

　いまはとⅱ参りたまひし後、一言葉の御なさけもなかりつるを、心憂しと思ふＡに、なほをり過ぐさずⅲのたまへるを見るに、　Ｘ　の涙を流せど、使ひは紛れ失せＢにければ、ただとどまる人Ｃにつけて、女王の君のもとに、

　　息の緒に君が心し⑥たぐひなば千重の波分け（　ａ　身　）をもなぐがに

　大将は、「難波の浦まで送らむ」とのたまひしかど、母宮、

　　「限りあらむ神のちかひにこそ添はざらめ、この国の境をだＤにいかでかは離れむ」

とのたまひて、こぞより松浦の山に宮を造りて、

「Ｂ帰りたまはむまでは、そなたの空を見む。若き老いたるとなき浮かべる身の、遠き舟路にさへ漕ぎ離れたまはむに、波風の心も知らず、たれもむなしくあひ見ぬ身とならば、やがてその浦に（　ｂ　身　）をとどめて、天つ振りけん例ともなり《　エ　なん　》」

と出で立ちたまへば、大将、限りある宮仕へを許されたまはねど、「Ｃ住みたまはんさまをだに見置かん」と添ひたまへれば、道のほどことに変れるしるしもなし。追ひ風さへほどなくて、ウ三月二十日のほどに、大宰府に着きたまひぬ。

（注）皇女つひに参りたまひぬ……神奈備の皇女が内してしまったことを指す。

女王の君……神奈備の皇女の母の身辺にいる女性で、氏忠の神奈備の皇女に対する恋心を知る人物。

息の緒に……命の限り、命にかけての意。

問１　空欄　Ｘ　に入れる語として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから選べ。

①　虹　　②　川　　③　氷　　④　血　　⑤　白

問２　《　ア　》～《　エ　》の「なむ（ん）」の文法的説明として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから、それぞれ選べ（同じものを、何回用いてもよい）。

①　動詞の一部＋助動詞「む」　②　動詞

③　助動詞＋助動詞　　　　　　④　助動詞

⑤　終助詞　　　　　　　　　　⑥　係助詞

ア＝［　　　］　　イ＝［　　　］　　ウ＝［　　　］　　エ＝［　　　］

問３　二重傍線部ⅰ～ⅲの敬語の種類と敬意の対象として最も適当なものを、次の各群のうちから、それぞれ選べ（同じものを、何回用いてもよい）。

・敬語の種類

　①　尊敬語　　②　謙譲語　　③　丁寧語

・敬意の対象

　①　大将　　　　　　②　母皇女　　　　　　③　氏忠

　④　神奈備の皇女　　⑤　安倍のせきまろ　　⑥　御門

ⅰ　敬語の種類　［　　　］　　敬意の対象　［　　　］

ⅱ　敬語の種類　［　　　］　　敬意の対象　［　　　］

ⅲ　敬語の種類　［　　　］　　敬意の対象　［　　　］

問４　波線部Ａ～Ｃの解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ選べ。

Ａ　いとどあぢきなさまさりて

　①　次第に不愉快な感情がこみあげてきて

　②　ますますやるせない気持ちが募って

　③　ひどく苦々しい気分になって

　④　一層、世の中の不条理を覚えて

　⑤　だんだんつまらなく感じるようになって

Ｂ　帰りたまはむまでは、そなたの空を見む

　①　息子がお帰りになるまでは、私は息子が向かった唐の空を見よう

　②　夫が都からお帰りになるまでは、私は夫がいる都の方角の空を見よう

　③　私が夫のもとに帰るまでは、息子は難波の浦の空を見るだろう

　④　息子が唐からお帰りになるまでは、夫は難波の浦の空を見るだろう

　⑤　夫が難波の浦にお帰りになるまでは、私は息子の任地である唐の空を見るだろう

Ｃ　住みたまはんさまをだに見置かん

　①　息子が唐で住みなさる様子だけでも見ておきたい

　②　息子と神奈備の皇女の暮らしぶりを見てみたいものだ

　③　御門がお住みになるだろう住まいさえ見ておけるなら

　④　せめて遣唐大使が滞在しなさる宮の有様だけでも見学したい

　⑤　妻である皇女がお住みになる様子だけでも見ておこう

問５　傍線部Ⅰ「おはせんさまをだに見聞かざらむことをいみじう思ふ」とあるが、この時の氏忠の心情説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから選べ。

①　宮仕えが余りにいので唐に行くのはうれしいことである一方で、両親から離れることになるのはひどく辛い。

②　御門に仕えることで紛らわしてきた恋心を唐に行くことで忘れられるのはうれしいが、御門の日常生活からは遠ざかるのでとても残念だ。

③　宮仕えの折々に見聞する神奈備の皇女のことを思い詰める自分を心配する両親の様子が心にかかり、渡唐に気乗りがしない。

④　両親、とりわけ母の病状が目に見えて進行していることから、渡唐することに強いためらいを感じる。

⑤　唐に行くと、神奈備の皇女のご様子さえ伝わらないだろうからたいそう悲しい。

問６　傍線部Ⅱ「そのほど」の「その」に相当する出来事として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから選べ。

①　時めきたまふ　　　　　　②　京を出づる

③　いまはと参りたまひし　　④　宮を造る

⑤　大宰府に着きたまひぬ

◎問７　太線部の神奈備の皇女が詠んだ和歌の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから選べ。

①　自分の心もあなたとともに唐に行かせると、入内した身でありながら人目を忍ぶ恋心を詠んでいる。

②　唐への渡航の波間に、これまでの悲しい思いを捨てて戻ってきて欲しいという願いを詠んでいる。

③　旅立ちを前にして、ようやく、これまで何の連絡もしなかった理由を和歌という形で明かしている。

④　今は離れても必ず再会できるという祈念を、表だっては伝えられないため、やかに和歌の表現に込めている。

⑤　唐という遠い土地に行った後は、日本にいる私のことを忘れて欲しいという別離の心を詠んでいる。

問８　（　ａ　）・（　ｂ　）の「身」が示す具体的人物として最も適当なものを、次の①～⑥のうちから、それぞれ選べ。

①　大将　　　　　　②　母皇女　　　　　　③　氏忠

④　神奈備の皇女　　⑤　安倍のせきまろ　　⑥　御門

ａ＝［　　　］　　ｂ＝［　　　］

【確認問題】

１　波線部ア～ウの語句の読みを現代仮名遣いでそれぞれ答えよ。

ア　宣旨　　（　　　　　　　　　　　　）

イ　御門　　（　　　　　　　　　　　　）

ウ　三月　　（　　　　　　　　　　　　）

２　傍線部①～⑥の現代語訳として適当なものをそれぞれ次から選べ。

①　ア　入ってしまいたいものだ

　　イ　入っていけたらいいのに

　　ウ　入るとしたらいやだ

　　エ　入るのはまだましなことだ

②　ア　どうしても

　　イ　なんとかして

　　ウ　かえって

　　エ　どっちつかずで

③　ア　愛らしく

　　イ　たいそう素晴らしく

　　ウ　度を越して

　　エ　ますます激しく

④　ア　送別の宴会

　　イ　乗馬のあそび

　　ウ　漢詩の競い合い

　　エ　京への旅行

⑤　ア　夜遅くまで

　　イ　夜になっても気にせず

　　ウ　一晩中

　　エ　夜も昼も続けて

⑥　ア　一緒に来るというならば

　　イ　この上なく大切ならば

　　ウ　消えてしまうようならば

　　エ　引き寄せられるならば

３　二重傍線部Ａ～Ｄの「に」の文法的説明として適当なものをそれぞれ次から選べ。

ア　ナ行変格活用動詞の連用形語尾

イ　形容動詞連用形の活用語尾

ウ　副助詞の一部

エ　完了の助動詞「ぬ」の連用形

オ　断定の助動詞「なり」の連用形

カ　格助詞

キ　接続助詞

Ａ［　　　］　　Ｂ［　　　］

Ｃ［　　　］　　Ｄ［　　　］

【補充問題】

４　傍線部ⓐ「いづれも」に該当するのは何と何か。それぞれ十五字以内で答えよ。

・［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

・［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

５　傍線部ⓑ「うれしけれ」と反対の気持ちを表した部分を本文中から抜き出せ。

［　　　　　　　　　　　　　　　］

【解答】

問１　④

問２　ア＝⑥　イ＝③　ウ＝③　エ＝③

問３　ⅰ＝①・⑥　ⅱ＝②・⑥　ⅲ＝①・④

問４　Ａ＝②　Ｂ＝①　Ｃ＝⑤

問５　⑤

問６　②

問７　①

問８　ａ＝③　ｂ＝②

【確認問題】

１　ア＝せんじ　イ＝みかど　ウ＝やよい

２　①＝イ　②＝ウ　③＝エ　④＝ア　⑤＝ウ　⑥＝ア

３　Ａ＝キ　Ｂ＝エ　Ｃ＝カ　Ｄ＝ウ

【補充問題】

４　・氏忠（自分）の唐への派遣を止めること（14字）

　　・神奈備の皇女の入内を止めること（15字）

５　あぢきなさ（「いみじう」も可。）

【現代語訳】

　絶えることのない思いに何も考えられないまま（日々を）過ごすうちに、翌年、遣唐使船を出されるはずの遣唐副使に（氏忠を）任命なさるという勅命が下る。大将も皇女も大変なことだとお思いになるが、総じて優れた（人材から）選ばれることなので、（氏忠の唐への派遣を）とめるような力はない。弁の君は、並々でなく血の涙を流すが、（氏忠の唐への派遣を止めることも神奈備の皇女の入内も）どちらも心のままになることではないので、神奈備の皇女はとうとう入内なさった。（神奈備の皇女が帝に）たいそう寵愛されなさることを見聞きすると、（氏忠は）ますますやるせない気持ちが募って、このような歌を詠んだ。

　　　普通ならこんなつらい目にもあわないで唐の雲の果てに入っていけたら

　　いいのに。

　朝夕の宮仕えにつけても、耐え難い（恋）心をも、かえって並みひととおりにあきらめるほど（都から遠く）こぎ離れてしまうようなことも、一方では嬉しいが、親たちの様子をはじめ、（神奈備の皇女の）お過ごしになるようなご様子さえ見たり聞いたりできないであろうことをひどく悲しく思ううちに、月日が過ぎて、遣唐使出発のころにもなった。

　式部大輔である参議安倍のせきまろという人を、大使として派遣なさるはずであったので、何はさておき世間の博士や様々な専門家が集まり、学才を試し、ますます激しく張り合って学ばせると、この少将（氏忠）は、あらゆる分野で不足なく才知に富んでいるので、帝もすばらしい人だとお思いになって、春、正下の位階に昇進させなさった。

　今は（もう出発だ）と出発して京を出る時に、身分の高いものも低いものも、送別の宴会を執り行う。一晩中漢詩を作りながら夜を明かして、（いよいよ）出発しようとする時に、たいそうお忍びでお与えになった、神奈備の皇女の歌、

　　　唐に向かう幾重にも重なって立つ波と一緒にして送り届ける（私の）心

　　も一緒に帰ってきて会いましょう。

　今は（もう氏忠とお別れだ）と入内なさった後、（神奈備の皇女からは）ひとことの恋情の知らせもなかったことを、（氏忠は）つらいと思うが、やはり（氏忠出発の）時を逃さずにおっしゃった歌を見ると、血の涙を流すが、（神奈備の皇女の）使いは（人に）紛れていなくなってしまったので、（氏忠は）ただ都に残る人にことづけて、女王の君のもとに、（歌を届けた）

　　　命にかけてあなたの心がきっと一緒に来るというならば、幾重にも重な

　　って立つ波をかき分けて（私は）我が身を平穏に保つように（帰って来ま

　　しょう）。

　大将は、「難波の浦まで送ろう」とおっしゃったが、母宮は、

　「（国の境界の中は守護しようという）限度のあるような神の誓願があるので、

　（あなたに、唐までは）付き添うことはしないでおこう。（しかし）この国の

　境界までの旅だけはどうして（あなたと）離れることがあろうか、いや離れ

　ない」

とおっしゃって、去年のうちから松浦の山に御殿をつくって、

　「（あなたが）お帰りになるまでは、そちらの空を見よう。若いとか老いてい

　　るとか定まらない（あなたの）頼りない身が、遠い船旅にさえ漕ぎ出そう

　　となさるような時に、（私が）波風の心も知らず、むなしく誰とも会わない

　　身となったならば、そのままその浦に身をとどめて、天つ領巾を振ったと

　　かいう（昔の）例のようになってしまおう」

と言って出発なさるので、大将も、制限のある宮仕えを許され（てお出かけになっ）たわけではないが、「（北の方が）お住みになるような様子だけでも見ておこう」と付き添いなさったので、（九州までの）道中は特別変わった兆候もない。追い風まで間もなく吹き始めて、三月二十日のころに、大宰府にお着きになった。